

児童・生徒の社会的自立に向けた個別の指導計画作成システムの構築(1)

——附属東雲小・中学校の在學生および卒業生保護者へのアンケート調査を通して——

黒瀬 基郎	鈴木 盛久	今崎 英明	荒森 紀行
石津 充	泉本 聖子	奥野 正二	関 和典
梶山 雅司	金子 和代	中田 美緒	船津 守久
谷本 忠明	小林 秀之	若松 昭彦	

I 問題と目的

平成13年1月に、「21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議」の最終報告が示され、その中で障害のある子どもの視点に立ち、一人ひとりのニーズに応じた支援を行っていくという方向性が提言されている。また、新しい学習指導要領においても、従来の「養護・訓練」が「自立活動」に変更され、「個別の指導計画」の作成が明記された。これらのことは、時代の要請に応じたものであり、個々の子どもの特性を最大限に生かし、社会参加の基盤となる資質や能力の育成を図るための教育的支援を行っていくことが、学校の役割として強く求められていると言えよう。

我々は、このような視点に立って、一人ひとりの児童・生徒の可能性の実現を志向し、全ての関係者と連携を図りながら、社会的な自立に向けた個別の指導計画を作成し、教育課程の中に取り入れ、実践につなげていこうと考えて、今回の共同研究を企画した。その最初の取り組みとして、家庭、附属学校、大学の相互協力の現状や課題などについて、保護者の忌憚のない意見を聞き、今後の三者間の連携を築き、よりよい教育を実現させていくためのアンケート調査を実施した。

II 方法

東雲小学校の在學生15名、東雲中学校の在學生24名、東雲中学校の過去10年以内の卒業生83名、計122名の保護者を対象として、平成14年12月20日から平成15年1月7日の期間、匿名によるアンケート調査を行った。アンケート用紙の配布は、在學生に対しては担任から直接渡す方法で、卒業生に対しては郵送で行った。回収は匿名で各校長へ親展で送付し、記述者の名前が特

定できないよう配慮した。

アンケートの内容は、学校を選んだ理由、学校での学習や生活について知っている程度、家庭の希望が学校に取り入れられている程度、教育に対する満足度、大学の協力関係のあり方、小・中学校の指導の一貫性、個別の教育計画についての要望、家庭・学校・大学の今後の協力のあり方等、全部で13項目であった。

III 結果と考察

1. 回収率等

回収数は、小学校在學生の保護者13部（回収率86.7%）、中学校在學生の保護者14部（同58.3%）、中学校卒業生の保護者37部（同44.6%）であった。なお、中学校卒業生の内訳は、東雲小学校からの入学11名、他小学校からの入学22名、不明4名であった。

2. 小・中学校在學生の保護者に関する結果

1) 学校選択の理由

表1は、最大5つまでの複数回答で学校選択の理由を尋ねた結果である。小学校、中学校共に、「学級の仲間が大勢いる」、「地域に通わせたい学校がなかった」、「自力通学ができるようになった」の回答数が多く、公立校特殊学級の少人数化の影響が推測される。また、中学校では、それら以外の回答は比較的分散しているのに対し、小学校では、「個に応じた教育が受けられる」、「見学して気に入った」、「大学教官の助言や専門的指導が受けられる」などの回答が多く、大学附属学校への期待がうかがわれる。

2) 子どもの学校生活に関する熟知度

表2は、自分の子どもの学校での学習や生活の様子

Motoo Kurose, Morihisa Suzuki, Hideaki Imasaki, Noriyuki Aramori, Mitsuru Ishizu, Seiko Izumoto, Masatsugu Okuno, Kazunori Seki, Masashi Kajiyama, Kazuyo Kaneko, Mio Nakata, Morihisa Funatsu, Tadaaki Tanimoto, Hideyuki Kobayashi, Akihiko Wakamatsu : System Development for Devising Individualized Instruction Programs for Students' Social Independence (1)—Results of the questionnaire responded by the parents of present and former students in special classes of the Attached Shinonome Elementary and Junior High School—

を、どの程度知っているかを聞いたものである。「あまり知らない」の回答が中学校で多い傾向が見られた。

3) 学校生活に関する情報源

表3は、最大3つまでの複数回答で、自分の子どもの学校での様子についての主な情報源を尋ねたものである。小学校では「参観日」と並んで「連絡帳」が多くなっているが、中学校では連絡帳よりも「他の保護者との話」や「子どもの学習物や話」等の方が多く、より間接的な手段で情報を得ている様子が見て取れる。

表1 学校を選択した理由

	小	中	
個に応じた教育が受けられる	6	3	
交流教育に力を入れている	1	2	
充実した教科学習指導が受けられる	1	3	
生活単元学習や作業学習に力を入れている	3	4	
小中一貫	4	3	
大学教官の助言や専門的指導が受けられる	5	2	
大学学生との交流や学習指導などを希望	1	3	
きょうだいを通して(いた)	0	1	
学級の仲間が大勢いる	7	9	
地域に通わせたい学校がなかった	7	7	
通学に便利	3	1	
自力通学ができるようにしたかった	10	6	
卒業生の様子や進路	0	1	
見学して気に入った	6	3	
先生に勧められた	1	0	
その他	教員の専門性を期待した	2	0
	健全な環境での教育	0	1
	四季折々の行事がある	0	1
	きょうだいを通していない	0	1
計	57	51	

表2 子どもの学校生活に関する熟知度

	小	中
とてもよく知っている	0	0
よく知っている	2	2
まあまあ知っている	9	8
あまり知らない	1	4
無回答	1	0
計	13	14

表5 家庭の希望の伝達方法

	小	中
保護者懇談会	5	4
家庭訪問	1	4
送迎時	0	1
電話	1	0
連絡帳	4	2
担任等との要請	0	2
希望調査	0	1
教育相談	1	0
計	12	14

表3 子どもの学校生活に関する情報源

	小	中
参観日	10	7
参観日以外の授業見学	3	1
送迎時の担任等との話	1	2
家庭訪問	1	0
保護者懇談会	4	4
学級通信等の配布物	3	3
連絡帳	9	3
担任等との電話	0	1
子どもの学習物や話	1	4
他の保護者との話	1	5
計	33	30

表4 家庭の希望の取り入れの程度

	小	中
十分取り入れられている	1	0
まあまあ取り入れられている	4	5
あまり取り入れられていない	4	5
全く取り入れられていない	0	0
要望すること自体があまりない	4	4
計	13	14

表6 教育の全体的な満足度

	小	中
とても満足	2	0
まあまあ満足	6	5
どちらでもない	1	2
あまり満足していない	4	5
全く満足していない	0	1
無回答	0	1
計	13	14

4) 家庭の希望の取り入れ

表4は、自分の子どもの教育についての家庭の希望が学校にどのくらい取り入れられているかを聞いたものであるが、小・中学校間でほぼ似通った回答傾向となった。しかしながら、「要望すること自体があまりない」の回答者の他の質問項目と対応させて見てみると、小学校では、後述の「教育の全体的な満足度」で「あまり満足していない」と回答した保護者が1名おり、項目ごとの満足度でも、「個に応じた教育が受けられる」、「交流教育に力を入れている」、「大学教官の助言や専門的指導が受けられる」では全く満足しておらず、「充実した教科学習指導が受けられる」でも、あまり満足していないと評価していた。一方、残りの3名は、全体的には「まあまあ」満足しており、学校への要望なども実際に記述していなかった。また、中学校では、全体的な満足度で各1名が「まあまあ」、「どちらでもない」であったが、他の1名は「学校にいろいろ言っても無理だと諦めて」おり、もう1名も全体的には「全く満足していない」と評価していた。

5) 家庭の希望の伝達方法

表5は、最大3つまでの複数回答で、自分の子どもの教育についての家庭の希望を学校に伝えた方法を探ったものである。小学校では「保護者懇談会」と「連絡帳」が多いが、中学校では、「担任等の要請」、「希望調査」なども見られるものの、「保護者懇談会」と「家庭訪問」が多くなっており、両校とも日常的に希望を伝える方法が少ないのではないかと考えられる。

6) 教育の全体的な満足度

表6は、自分の子どもが現在受けている教育に対す

る全体的な満足度を聞いたものである。小学校では「とても満足」、「まあまあ満足」を合わせると半数以上になるが、「あまり満足していない」の回答も4名見られている。これらの保護者は次に述べる教育の項目ごとの満足度も低く、特に「個に応じた教育が受けられる」、「交流教育に力を入れている」、「充実した教科学習指導が受けられる」、「大学教官の助言や専門的指導が受けられる」、「教材や設備が整っている」では、全員もしくは3名が、満足していない方向での評価を下していた。一方、中学校では「とても満足」の回答はなく、他の記述内容から不満足方向の回答が推測される「無回答」を含めると、半数が現状に満足していないと推測される。

7) 教育の項目ごとの満足度

表7は、教育に対する項目ごとの満足度を評定平均値で示したものである。なお、「全く満足していない」、「あまり満足していない」、「どちらでもない」、「まあまあ満足」、「とても満足」の順に評定値1～5が該当する。小学校では、「自力通学ができるようになった」、「学級の仲間が大勢いる」、「家庭との連携がとれている」、「生活単元学習や作業学習に力を入れている」、「大

表7 教育の項目ごとの満足度（評定平均値）

	小	中
個に応じた教育が受けられる	2.5	3.0
交流教育に力を入れている	2.6	2.5
充実した教科学習指導が受けられる	2.5	2.6
生活単元学習や作業学習に力を入れている	3.7	3.6
大学教官の助言や専門的指導が受けられる	2.3	2.1
大学学生との交流や学習指導などがある	3.6	3.3
学級の仲間が大勢いる	3.8	4.4
教材や設備が整っている	2.4	2.4
通学に便利	3.0	2.4
自力通学ができるようになった	3.9	4.6
仲のよい友達できた	3.4	3.9
家庭との連携がとれている	3.8	2.8

学学生との交流や学習指導などがある」が、また、中学校でも、「自力通学」、「学級の仲間」、「仲のよい友達ができ」、「生活単元学習や作業学習」が評定平均値3点台の後半であり、総じて満足している項目であると言える。一方、両校共に、「大学教官の助言や専門的指導が受けられる」、「教材や設備が整っている」、そして中学校の「通学に便利」は評定平均値が2点台前半であり、満足できていない項目と思われる。

これらの結果より、小・中学校では、自力通学が可能になり、学級集団が構成されていることで、生活単元学習や作業学習に重点を置いた指導を受けることができる一方で、附属学校としてのメリットが少なく、特に中学校では、折角遠方から入学しても、通学の不便さを感じながら学校生活を送っている様子が見られる。さらには、両校共に、上記の項目他には現在これといった特色がないと言えるのかも知れない。

8) 大学の協力関係のあり方

表8は、大学としての、学校や家庭との望ましい協力関係のあり方に関する自由記述の結果をまとめたものである。小・中学校共に、専門的な指導・助言や保護者との情報交換が多く望まれていることが分かる。

9) 指導の一貫性

表9は、小学校と中学校間での指導の一貫性について、小学校在学生の保護者には期待度を、中学校在学生の保護者には満足度を尋ねたものである。また、表

表9 指導の一貫性

	小	中
とても期待（満足）している	5	0
まあまあ期待（満足）している	2	0
どちらでもない	2	7
あまり期待（満足）していない	4	3
全く期待（満足）していない	0	3
無回答	0	1
計	13	14

表8 大学の協力関係のあり方

	小学校		中学校	
	記述数	例	記述数	例
指導・助言	4	子どもが成長できる指導を積極的にして欲しい。	1	学校、学級内での指導方法で不適切な点があるのに、大学は全く関心がないのが不思議。もっとアドバイスすべき。
保護者との情報交換	2	話し合いや手紙などによる情報交換の機会が欲しい。	6	・教官と保護者が話し合う時間を多くとることが望ましい。 ・大学の教育方針、研究内容を保護者が直接理解することで、学校の指導のあり方を考え協力していくことができる。
相談窓口	1	問題行動等に即時に専門的なアドバイスを受けられるシステムを作って欲しい。	1	指導等の問題や疑問を円滑に解決、改善するために、大学と家庭を結ぶ窓口があれば良い。
子どもを研究	2	大学で子ども達を研究？して今後の障害児教育に生かして欲しい。		
その他	2	・最新の研究に基づいた教材を開発して、それを附属で使用する。 ・大学と家庭は無縁のものと感じていたが、今後はそうでなくなるかと期待している。	3	・月1回でもいいから出来ればクラスごとに指導して欲しい。 ・休日や学校行事などでかかわってもらえる学生を希望する。 ・初めて大学関係者の名前を知り関与していたのだと知った。

表10 指導の一貫性（自由記述）

	小 学 校		中 学 校	
	記述数	例	記述数	例
教官の連携	3	・情報交換をしっかりと欲しい。 ・教官の交流が少ないと聞いている。 ・教官の連携がとれているのか心配。	4	・小、中の連携が全く見られない。 ・先生の考え方が全く違うと思う。 ・情報交換のあり方や指導の姿勢に統一されたものがないのではと感じる。
その他	2	・一貫性があるとは思えない。 ・交流行事等が少ない。	1	何を一貫性として教育しているのかわからない。

表11 個別教育計画作成への参加

	小	中
是非参加したい	9	9
まあまあ参加したい	4	4
どちらでもない	0	0
あまり参加したくない	0	1
全く参加したくない	0	0
計	13	14

10は、自由記述の結果をまとめたものである。これらより、小学校では小・中学校間での連携について、希望や不安が入り交じった状態にあると考えられるが、中学校の保護者は、より厳しい評価を行っていることが示されている。

10) 個別教育計画作成への参加

表11は、年間や学期ごとに一人ひとり教育計画を作成するための話し合いで、保護者の要望や意見を述べる機会があれば、参加を希望するかどうかについて聞いたものであり、表12は、それに関する自由記述の結果である。小・中学校共に、機会があれば参加したい意向が顕著である。また、中学校では、現在行われている指導の計画や内容について、保護者への説明を求める意見が見られている。

11) 家庭・学校・大学の今後の協力のあり方

表13は、家庭・学校・大学の今後の協力のあり方に関する自由記述の結果をまとめたものである。前述の、大学の協力関係のあり方と重なる記述も散見される

表12 個別教育計画作成への参加（自由記述）

	小 学 校		中 学 校	
	記述数	例	記述数	例
積極的意見	3	・親の意見も是非聞いて欲しいし、学校と家庭の方針は同じであるべき。 ・多くの情報が欲しいので、機会があれば是非参加したい。 ・学校と家庭の一貫した行動マネジメントと最適な個別教育プログラム下での教育を切望。	2	・一人ひとりのことを考えてくれるなら喜んで参加したい。 ・親と他人が子どもを見る目には違いもあるので、話し合いたい気持ちはたくさんある。
保護者への説明			3	・どのような話し合いで作成されたのか説明がない。親も納得できる話し合いをしたい。 ・家庭でも生かしたいので、学校での指導がどのように計画されたのか内容を知っておきたい。 ・小学校では個人的にも指導について説明があったが、中学校では全体の事のみなので、個々の指導目的等よく分からない。
悲観的意見	1	理想ではあるが、現状ではとても無理では。		
その他	1	指導の結果を先生と話し合うことは重要と思う。		

表13 家庭・学校・大学の協力のあり方

	小 学 校		中 学 校	
	記述数	例	記述数	例
専門的教育	3	より専門性のある教育を受けたい。		
三者の連携			2	・三者がチームを作って今後の指導目標や方法など話し合っただけ、一体となって取り組むのが望ましい。 ・三者に相互関係があるのが良い。
情報交換	1	大学の役割をもっと説明してほしい。	2	・学校、大学の教員の指導の方向性等の話を聞く機会を作って欲しい。 ・これまで学校の指導方針に立ち入らなかったが、家庭と学校はもう少し近づく必要があると思う。
その他	1	担当教官でも学生でもつけて、より良い教育法を研究し、その経過を家庭に分かりやすく伝えて欲しい。		

表14 その他の記述

	小 学 校		中 学 校	
	記述数	例	記述数	例
個別的な教育	4	・集団授業形態でも個別の評価、課題は不可欠。 ・それぞれの個性をのばす教育になっていない。	3	・その子に必要なことを考え、その子に合った教育研究を進め、それを家庭にも知らせて欲しい。 ・個別の連絡帳や宿題があればいい。 ・障害に合った教育指導が必要。
個別指導	2	・個別指導が全くないのは問題。 ・生活指導は進んでいるが個別の教科教育では他校が進んでいる。		
教員の専門性、資質	1	専門的な知識をもって指導して欲しい。	3	・ハートで接することのできる教師を育てて欲しい。 ・子どものことをポジティブに報告し、「同じ気持ち」で受けとめる教師であれば、相互協力も違ったと思う。
教員数、忙しさ			3	・8対1と非常に厳しい体制で、充実した指導は受けられないのではと不安。成果が挙げられる体制を整えて欲しい。 ・子どもの数が違うので、小学校と同じ指導は無理だろう。 ・先生が忙し過ぎて何かを頼めない。事務的作業は取り去れないのか？
時代遅れ			2	・柔軟な対応も増えた公立小などに比べると、指導のあり方が時代の流れに遅れをとっているようにさえ見える。 ・最善の指導がなされるとばかり思っていたが、入学してみたら大昔の感じががっかりしている。
その他	4	・個に応じた教育、交流教育、教科学習、大学教官の助言は現実離れ。項目として挙がっているのが不思議。改善を求めていてもいいのか？ ・実習以外は他校との差が見られない。 ・学生には普通学級での障害児、他児への指導方法について学んで欲しい。 ・地域の学校との交流が出来たらいい。	5	・「社会的自立」を目指した教育・研究を行うのであれば、高等部まで必要のではないか。 ・もっと開かれた教育現場にすべき。 ・研究、発表会など、親が参加しないといけない事が多過ぎる。 ・このようなアンケートは、親の意識もはっきりしてきて良い。 ・今さらなぜアンケートを、と思うが、早速改善の努力を期待する。

が、三者間の情報交換や連携の要望が主に見て取れる。
12) その他の記述

表14は、このアンケート自体への感想・意見欄に書かれたものを中心に、これまでの項目には含まれない記述をまとめたものである。これらを見ると、上述の個別教育計画作成への保護者の参加などを論じるより先に、現在の学校や教育のあり方を尋ねる項目が必要であったことが痛感される。附属学校に対する大学の責任も含めて、抜本的な対応が早急に検討される必要があると言えよう。

3. 中学校卒業生の保護者に関する結果

東雲小学校からの入学（以下、東雲小と表記する）、他の小学校からの入学（以下、他小と表記する）別の回収数の内訳を表15に示す。また、回答者の子どもの卒業年は、東雲小は平成2（1990）年から平成14（2002）年、他小は、平成3（1991）年から平成14（2002）年であった。結果の集計にあたり、卒業の時期による違いを検討するため、最近5年間の卒業（平成10（1998）年以降卒業）と平成9（1997）年以前卒業とに分けて集計を行い、両群間で結果の違いが見られる場合には、群別の集計結果を示し、それ以外は卒業校別に集計した結果を示すこととした。

表15 卒業年でみた回収数の内訳（人）

卒業校	東 雲 小		他 小			学校不明	計
	H9以前	H10以降	H9以前	H10以降	不明		
卒業年	H9以前	H10以降	H9以前	H10以降	不明		
回収数	5	6	11	10	1	4	37
計	11		22			4	

1) 学校選択の理由

東雲中学校を選択した理由について尋ねた結果を表16に示す。なお、項目のまとまりごとの表記は、質問紙において用いたものに従った。

「教育の内容」、「教育の条件」、「その他」について、1項目あたりの平均選択人数を求めたところ、「教育の内容」が12.8人、「教育の条件」が12.0人、「その他」が9.6人と、「教育の内容」、「教育の条件」に関する事項が学校選択の理由として多く選ばれていた。

各項目で見ると、「教育の内容」では、「個に応じた教育が受けられる」、「生活単元学習や作業学習に力を入れている」の選択度数が高いことが分かる。また、「教育の条件」について見ると、「学級の仲間が大勢いる」、「地域に通わせたい学校がなかった」が多く選ばれていた。「その他」では、「見学して気に入った」、「自力通学ができるようになった」、「卒業生の様子や進路」が多く選択されていた。

卒業校別に見ると、「教育の内容」、「その他」に関

表16 東雲中学校を選択した理由(人)

		(n=37)			
		東雲小	他小	学校不明	計
教育の内容	個に応じた教育が受けられる	5	15	0	20
	交流教育に力を入れている	4	4	1	9
	充実した教科学習指導が受けられる	4	6	1	11
	生活単元学習や作業学習に力を入れている	5	10	1	16
	進路指導・現場実習が充実している	0	7	1	8
教育の条件	小中一貫	9	0	0	9
	大学教官の助言や専門的指導が受けられる	3	4	0	7
	大学学生との交流や学習指導などを希望	2	8	1	11
	きょうだいが通っている(いた)	0	1	0	1
	学級の仲間が大勢いる	4	17	2	23
その他	地域に通わせたい学校がなかった	3	14	4	21
	通学に便利	2	4	0	6
	自力通学ができるようにしたかった	2	6	4	12
	卒業生の様子や進路	4	6	2	12
	見学して気に入った	2	9	2	13
誰かに勧められた	1	4	0	5	
その他	2	2	0	4	

しては同様の傾向であったが、「教育の条件」については、東雲小では「小中一貫だから」が最も多く選択されていたのに対し、他小では「学級の仲間が大勢いる」、「地域に通わせたい学校がなかった」という理由が多く選ばれていた。

選択される理由は、広い意味で学校に期待する内容と考えることができるが、ここでは個に応じた教育や生活単元学習などの教育内容に対する期待がうかがえる。特に、東雲小から入学する場合には、小中一貫の教育に対する期待が大きい。他小から入学する場合には、学級に仲間が大勢いることや、地域に通わせたい学校がないことが多くの理由となっている。また、学級の様子を見学したことも選択の理由として比較的多く挙げられている。これらは見方を変えれば、東雲中学校の教育に対して他にはない内容に対する期待が現われており、また中学校の様子についての情報を広く提供することが大切であると言える。

2) 子どもの学校生活に関する熟知度

子どもが学校で行っている学習や生活について、どの程度知っていたかを尋ねた結果を表17に示す。なお、他小の無回答1名を除いている。

これによれば、子どもの様子を明確に把握していたと考えられる「とてもよく」、「よく」を選択した保護者は全体の半数に達していないことが分かる。卒業校別では、東雲小の半数以上が「とてもよく」あるいは「よく」知っていたのに対し、他小では、「まあまあ」知っていた保護者が81.0%になっていた。

いずれの卒業校の保護者に対しても同じように情報伝達が行われていると思われるが、上記の違いが見られたのは、東雲小の場合、東雲小学校に在学したこと

表17 子どもの学校生活に関する熟知度(人)

		(n=36)			
		東雲小	他小	学校不明	計
	とてもよく知っていた	1	0	0	1
	よく知っていた	6	4	0	10
	まあまあ知っていた	4	17	3	24
	あまり知らなかった	0	0	1	1

表18 子どもの学校生活に関する情報源(人)

		(n=34)			
		東雲小 (n=11)	他小 (n=20)	学校不明 (n=3)	計
	参観日	4	14	3	21
	参観日以外の授業見学	1	4	0	5
	送迎時の担任等との話	2	2	0	4
	家庭訪問	0	3	2	5
	保護者懇談会	7	9	1	17
	学級通信等の配布物	3	5	0	8
	連絡帳	8	9	2	19
	通知表	0	1	0	1
	担任等との電話	2	6	0	8
	子どもの学習物や話	1	9	1	11
	他の保護者との話	4	6	1	11
	その他	0	0	0	1

で中学校の様子が分かっていることを示すものと考えられる。

とは言え、全体として見ると、少なくとも保護者の側からすれば、子どもの学習や生活の様子が十分に伝わっていると受けとめられていない状況があるように思われる。学校からどのような形で子どもの情報を伝えるかが求められていると思われる。

3) 学校生活に関する情報源

前記の設定で、熟知度が「とてもよく」、「よく」、「まあまあ」と回答した34名について、子どもに関する情報をどこから得ていたかについて尋ねた結果を表18に示す。

全体として見ると、「参観日(61.8%)」、「連絡帳(55.9%)」、「保護者懇談会(50.0%)」が多く選ばれており、半数には及ばないものの、「子どもの学習物や話(32.4%)」や「他の保護者との話(32.4%)」も比較的多く選ばれていた。卒業校別に見ると、他小の場合に、東雲小に比べて「参観日」が情報源となっている事が多くなっていた。

学校における学習や生活の様子などの子どもに関する情報は、学校から保護者へ発信される情報であるが、それがどのような媒体や機会を通して保護者に届くか、また、どのくらいの頻度で保護者に届くかが、学校での子どもの様子が分かっているという保護者の意識に影響してくるものと考えられる。

さらに、前項の設定で子どもの様子について十分な情報を得ているという回答が比較的少なかったことと照らしてみると、特に個々の子どもに関する情報提供

表19 家庭の希望の取り入れの程度

(n=37)

	卒業校 卒業年		群計	他 小			群計	学校不明	計
	～H9	H10～		～H9	H10～	不明			
十分に取り入れられていた	2	0	2	2	1		3	0	5
まあまあ取り入れられていた	3	3	6	5	7	1	13	2	21
あまり取り入れられなかった	0	3	3	0	2		2	0	5
全く取り入れられなかった	0	0	0	0	0		0	0	0
要望することがなかった	0	0	0	4	0		4	2	6

のあり方が重要になってくると思われる。保護者は「連絡帳」、「参観日」、「保護者懇談会」を通して情報を得ているが、連絡帳以外は、毎日の情報を提供するものではない。また、連絡帳は、保護者と教師とで双方向性はあるが、直接の面談を通して伝わる情報ではない。

子ども自身や他の保護者からの話は、情報としては一方である。個々の子どもの様子について、双方向的な形で細やかに伝える方策が、今後の家庭と学校との連携を構築する要素の一つと言える。

4) 家庭の希望の取り入れ

子どもの教育に関する家庭からの要望がどのくらい学校に取り入れられていると思うかについて尋ねた結果を、卒業年群ごとに表19に示す。なお、卒業校が不明の4名のうち、2名の卒業年は平成8年と平成12年であった。前者は「要望がなかった」、後者は「まあまあ取り入れられていた」という回答であった。残り2名は卒業年が無回答であった。

これによれば、「全く」取り入れられなかったとする回答はなかったものの、学校への要望が取り入れられた程度は、「十分に」から「あまり」まで分かれていた。卒業年群ごとに見ると、「あまり」取り入れられなかったとする回答は、東雲小、他小とも最近の卒業生の保護者に見られることが分かる。また、「要望することがなかった」という回答も、平成9年以前の卒業群のみに見られている。この4名については、後述する「中学校への満足度」という設問で、「とても満足」と回答した者が2名、「まあまあ満足」と回答した者が2名となっている。「要望がない」ことが不満足なことを背景としているよりも、ある程度の満足を感じていたために要望する必要性を感じなかったという事であろうと思われる。

しかし、「十分に」取り入れられていると感じている保護者は全体の13.5%であり、「まあまあ」の56.8%との開きが大きいように思われる。上述の情報の伝達の仕方とも関係して、保護者の要望が学校に届く体制、逆に、学校の教育活動の意図やねらいが保護者に理解される形で届く体制、両者を結ぶ体制が必要と考えられる。

5) 家庭の希望の伝達方法

表20 家庭の希望の伝達方法 (人)

(n=26)

	東雲小 (n=8)	他小 (n=16)	学校不明 (n=2)	計
保護者懇談会	4	12	3	19
家庭訪問	2	8	0	10
送迎時の担任との話	2	2	0	4
担任等への電話	2	2	2	6
担任等への手紙	0	1	1	2
連絡帳	7	6	0	13
直接学校に向いた	1	0	2	3
他の保護者を通じて	0	0	0	0
担任等からの要請	0	4	0	4
年度初めなどの希望調査	0	0	1	1
その他	0	0	1	1

表20は、前項の設問で、家庭からの要望が「十分」、「まあまあ」取り入れられたと回答した保護者について、要望を伝えた方法について尋ねた結果である。

その結果、「保護者懇談会」、「連絡帳」、「家庭訪問」が主な方法としてあげられていた。担任との直接のやりとりも挙がっているが、数としては多くない。前述したが、保護者が要望を取り入れられていると感じられるためには、通常の方法以外に、担当する教師に保護者が要望を直接届けることのできる恒常的な機会や方法が確立されていることが重要であると思われる。

6) 教育の全体的な満足度

中学校で受けた教育に対する満足度について尋ねた結果を表21に示す。表から、平成10年以降の保護者では否定的な回答が見られていることが分かる。数は7名(18.9%)であるが、平成9年以前の群では見られていない回答である。また、全体で見ても、ほぼ半数の回答(48.6%)が「まあまあ」であり、「とても」という回答(32.4%)よりも多くなっている。

7) 教育の項目ごとの満足度

表22は、項目ごとに満足度について5段階評定(とても満足～全く満足していない)を求め、回答人数で割った評定平均値を示したものである。評定平均値が4.0(まあまあ満足)以上の項目は3項目で、「学級の仲間がいた」、「自力通学が可能になった」、「仲の良い友だちができた」であった。学校の教育内容に関する項目については、いずれも3点台であった。特に、「大学教官の助言や専門的指導」に関しては、2.0と全項

表21 中学校の教育に対する満足度（人）

(n=37)

	卒業校 卒業年		群計	他 小			群計	学校 不明	計
	～H9	H10～		～H9	H10～	不明			
とても満足	3	1	4	4	4		8	0	12
まあまあ満足	2	2	4	7	3	1	11	3	18
どちらでもない	0	1	1	0	2		2	1	4
あまり満足していない	0	1	1	0	1		1	0	2
全く満足していない	0	1	1	0	0		0	0	1

表22 中学校の教育に対する満足度（評定平均値）

(n=37)

	卒業校 卒業年		群	他 小			群	学校 不明	全体
	～H9	H10～		～H9	H10～	不明			
個に応じた教育が受けられる	4.2	2.5	3.3	4.1	3.5	3.0	3.8	3.5	3.6
交流教育に力を入れている	4.4	2.5	3.4	3.8	3.0	3.0	3.4	3.5	3.4
充実した教科学習指導が受けられる	3.6	2.7	3.1	4.0	3.2	4.0	3.6	3.0	3.4
生活単元学習や作業学習に力を入れている	4.2	3.0	3.5	4.2	2.7	4.0	4.0	3.8	3.8
進路指導や現場実習が充実していた	4.6	2.7	3.5	4.1	3.6	4.0	3.9	3.5	3.7
大学教員の助言や専門的指導が受けられる	3.2	2.0	2.5	3.0	2.9	2.0	2.9	2.0	2.7
大学学生との交流や学習指導などがある	3.8	3.5	3.6	3.8	3.7	3.0	3.7	2.7	3.6
学級の仲間が大勢いる	3.6	4.0	3.8	4.7	4.6	3.0	4.6	4.8	4.4
教材や設備が整っている	3.6	2.5	3.0	3.4	3.9	2.0	3.6	3.7	3.4
通学に便利	4.3	3.8	4.0	3.4	3.3	3.0	3.5	3.5	3.5
自力通学ができるようになった	4.6	4.0	4.3	4.3	4.3	5.0	4.3	4.8	4.4
仲のよい友達ができた	4.3	3.8	4.0	4.1	4.4	4.0	4.2	4.0	4.1
家庭との連携がとれている	4.4	2.5	3.4	4.3	3.7	4.0	4.0	3.5	3.8

目中で最も低く、満足度の低さが顕著であった。大学との連携の不十分さが感じられており、これは、卒業年度にかかわらず同様の結果であった。

卒業年度ごとに見ると、ほとんどの項目で平成10年以降の平均値が平成9年以前のそれよりも下がっていることが示された。値が増加している項目は、東雲小の「学級の仲間が大勢いた」と、他小の「教材や設備が整っている」および「仲のよい友達ができた」のみであった。

全体を通して項目を見ると、特に教育の内容に関係する項目の評価平均値が以前に比べて低下していることと、大学との連携があることについて以前も最近も同様に満足度は低いことが示された。こうした評価につながる現在の教育内容や、連携の体制について改善の方向を具体的に洗い出していくことが必要である。

8) 指導の一貫性

東雲小群について、東雲小と東雲中との間での指導の一貫性について満足度を尋ねた結果を表23に示す。これによれば、満足度の評価は高低2つに分かれている。さらに、比較的満足度の高いのは平成9年以前群であり、満足度が低いのは平成10年以降群である。具体的にどのような内容に対してそうした評価がなされたのかについては設問で尋ねていないが、現行の一貫性のあり方、すなわち今後の教育課程の小・中連携のあり方についての検討が求められていると言える。

表23 指導の一貫性に対する満足度（人）

(n=11)

	卒業校 卒業年		計
	～H9	H10～	
とても満足	2	0	2
まあまあ満足	2	1	3
どちらでもない	0	0	0
あまり満足していない	0	4	4
全く満足していない	1	1	2

この点について、自由記述欄(平成9年以前群では、2名3件、平成10年以降群では5名11件の記述があった)に書かれていた内容について見ると、肯定的な意見としては、平成9年以前群に、「教育方法は異なっていたが子どもはよく理解してもらっていた」という記述があった。しかし、他方で、卒業年によらず、「小学校までの教育内容とは一貫性が見られない」(平成9年以前1件、平成10年以降6件)、「同じ担任が3年間担任するシステムの意味が不明」(平成10年以降2件)、「学校間のコミュニケーション不足」など、十分な連携がとれていない事や教育方法への疑問に関する記述が多く見られた。

小学校と中学校での教育課程の違いはあり、それに伴う教育方法の違いも当然あって良いが、教育課程の目指すものや特徴など、保護者からそのことの持つ意味について十分に理解を得ているとは言えない状況にある事がうかがえた。

表24 個別教育計画作成への参加（人）

(n=37)

	卒業校 卒業年		群計	他 小			群計	学校 不明	計
	～H9	H10～		～H9	H10～	不明			
ぜひ参加したかった	3	4	7	7	3	1	11	2	20
まあまあ参加したかった	0	2	2	3	3		6	1	9
どちらでもない	2	0	2	1	4		5	1	8
あまり参加したくなかった	0	0	0	0	0		0	0	0
全く参加したくなかった	0	0	0	0	0		0	0	0

表25 小中学校時代に身につけておくことが必要な力（重複回答）

()内は回答数

<ul style="list-style-type: none"> ・身辺自立（身辺整理）（7） ・移動（交通機関の利用）・外出（5） ・挨拶・返事（5） ・集団で生活する力（3） ・基本的な生活習慣（4） ・計算・買い物（お金の計算）（3） ・読み書きの力（3） ・自分でやろうとする意欲（3） ・自分の気持ちを表す力・コミュニケーション力（2） 	<ul style="list-style-type: none"> ・時計を読む力（2） ・繰り返し・継続的な指導（2） ・言葉遣い ・人との接し方 ・自己コントロール力 ・就労意欲 ・緊急時の電話 ・小さいときからのしつけ
--	---

9) 個別教育計画作成への参加

個別教育計画作成の際に、保護者も参加する機会があったとしたら参加したかったかについて尋ねた結果を表24に示す。

卒業年によらず、ほとんどの保護者（78.4%）が参加の希望を持っていることが分かる。保護者も教育の重要な担当者として参加してもらえる可能性が高い。家庭と学校との連携を考える際には、保護者も含めた個別教育計画作成の体制作りが必要になると言える。

ただ、この設問についての自由記述を見ると、保護者の持つ思いを解消する部分も併せて必要ではないかと思われる。すなわち、個別教育計画の作成は重要であるという記述とは別に、大学教官の関わり方が不明、教育にどう取り込まれていくのか分かるものにする必要がある、どういう視点で作成されるのか関心がある、教師や保護者の賛同が必要といった記述が見られていた。保護者の思いが十分に反映されるという、個別計画本来の姿にするために、家庭、学校、大学の3者の協力関係のあり方が問われてくると思われる。また、それを遂行するためには、いわゆる「専門性の確保」の問題も生じてくるものと思われる。

10) 小中学校時代に身につけておくことが必要な力

在学中に身につけておくべき力、あるいは身につけておいて良かったと思われる力について自由記述で求めた結果、28名から45の記述が得られた。その内容を表25に示す。

内容は多岐にわたっているが、大きく分ければ、身辺自立や基本的な生活習慣など、生活に関する能力と、読み書きの力、表現力などの学習に関する基礎的能力

表26 大学の協力関係のあり方（重複回答）

記述例の()内は回答数(1は省略)

	記述数	例
専門的 関与	8	・保護者・教師への具体的専門的助言の提供（5） ・個に応じた教育ができるための関わり ・保護者や子どもの不安を取り除く存在 ・大学の専門性が生かされていない
基礎的 研究	4	・子どもの障害の状態の的確な把握（2） ・障害に関する資料収集と実践への適用・種々の教育方法の試み（2）
情報 提供	4	・卒業生への情報提供 ・入学希望者への事前の情報提供 ・学習会・連絡会の実施 ・学校での教育が保護者に分かるようにする
学生 の 関与	4	・学生を用いた指導補助 ・教育実習生としての一生懸命な関わり ・大学訪問（大学生との交流）の機会の増加 ・学生による障害理解の深化
専門 教師 の 性	2	・教師の専門性の向上が必要（2）
他 の	1	・青年学級

についての内容が多くを占めていることが分かる。こうした内容を教育課程に盛り込むにあたっては、両方の視点が求められると思われる。

11) 大学の協力関係のあり方

大学としての、学校や家庭との望ましい協力関係のあり方について自由記述で求めた結果、15名より23の回答が得られた。その結果を表26に示す。

結果から、大学による専門的な関与や、教育に関連した研究などを望む声が多い。また、情報の提供、学生の関与などについての期待も見られた。これまで、大学として十分に対応できていない点についての指摘

表27 家庭・学校・大学の今後の協力のあり方
(重複回答)

		記述例の()内は回答数(1は省略)
	記述数	例
協力の構築	5	<ul style="list-style-type: none"> 三者が一体となった話し合いの場や協力体制の構築が必要(3) 大学は次子どもにつながる研究に力を入れて欲しい(2)
小中学校の教育のあり方	6	<ul style="list-style-type: none"> 中学校は小学校よりも大学との関わりが少ない 中学校も個別の指導に重点を置いて欲しい 小学校からの進学者のほうが教育効果があがっている 心を育てる教育の実施(現在の方法の改善)(2) 指導する教員の増員
その他	3	<ul style="list-style-type: none"> 教育相談や個別指導が受けられる窓口の設置 卒業生を対象としたボランティアの提供 教育実習生の子どもをとらえる視点の深化を図る

表28 その他の記述(重複回答)
記述例の()内は回答数(1は省略)

	記述数	例
小中学校の教育のあり方	12	<ul style="list-style-type: none"> 教師の子どもへの対応は良かった 中学校でできるようになったことがある 東雲に通ったことが自慢 卒業生対象の行事があるのがよい 小学校から入学させればよかった 教育が変わることを望む 子どもは楽しかったという思いが少ない 参観した授業に満足できるものがなかった 発展を願っている 小中の一貫教育の実現を望む いろいろ経費がかかるのが負担だった よく思い切って通学させたと思う 入学させてもらったという意識が強かった
アンケートについて	3	<ul style="list-style-type: none"> もっと早く実施して欲しかった 忙しい時期の実施は適当でない アンケートの必要性が不明(本来東雲の教育は個を育てることが理念なのでは)

であると言える。

12) 家庭・学校・大学の今後の協力のあり方

三者の今後の関係のあり方について自由記述で求めた結果、11名より14の回答が得られた。その結果を表27に示す。いくつかの意見が見られているが、大学に対する要望、中学校教育に対する要望が多い。協力の中身が具体的な形として現われてくるような体制作りが必要とされている。

13) その他の記述

表28に、今回の調査への感想・意見欄に自由記述で記載された内容についてまとめた。回答は、7名より16の回答が得られた。記述は多くの保護者から得られたわけではないが、肯定的な内容、批判的な記述が混在している。残り多くの保護者もこうした思いがそれぞれにあると思われるが、アンケート回収率の低さは、実施時期の問題だけでなく、家庭・学校・大学のあり方への期待の低さを反映していることも否定できないであろう。少なくとも、これまでのあり方を変える段階に来ていることだけは言えるであろう。

IV 結論

今回のアンケート調査を通して、多くの貴重な意見や要望等を頂くことができました。それらの多くは、大学、附属学校に改善を求めるものである。大学としては、保護者および附属学校と緊密な連携を構築し、専門的な知見をもって教育実践に深く関わっていくことが強く求められている。また、附属学校に対しては、保護者の意見を十分に生かした、一人ひとりの児童・生徒に応じた教育方法および内容、保護者や地域に開かれ

た学校、情報の詳細な開示、大学と附属学校間との連携および附属学校における一貫性、附属学校でしかできない特長のある教育の実践、そして教師自身の専門性の向上が強く望まれている。これら全ての意見や要望は、今すぐ改善に向けて真剣に取り組んで行かなければならないものであると考える。我々は、保護者の意見や要望等を真摯に受け止め、相互の連携を深め、かけがえのない児童・生徒一人ひとりの可能性の実現に向けて努力を惜しんではいけないと痛感している。

謝辞

保護者の皆様には、年末年始のお忙しい時期にアンケートにご協力いただきまして、心より感謝申し上げます。

参考文献

- 安藤隆男編著「自立活動における個別の指導計画の理念と実践」 川島書店 2001
- 福永博文・藤井和枝編著「障害をもつ子どもの理解と援助」 コレール社 2001
- 大南英明編著「改訂 盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領の展開」 明治図書 2000
- 清水貞夫著「障害児のための授業づくり」 全国障害者問題研究会 2000
- 全国知的障害養護学校校長会編著「新しい教育課程と学習活動 Q&A」 東洋館出版社 1999
- 全国知的障害養護学校校長会編著「個別の指導計画と指導の実際」 東洋館出版社 2000